

## 令和元年度 奈良市立学園南こども園 研究実践概要

園長名 神田 美智代  
全園児数 192名

### 1. 研究主題

「生き生きと生活し、意欲を持ってやりとげる子どもをめざして」  
— 異年齢児や身近な自然、豊かな環境を通して —

### 2. 研究年度 初年度

### 3. 研究主題設定理由

今年度より保育園からこども園へと移行し、カリキュラムの見直し、職員間でのカリキュラムの共有、新園舎への引っ越しによる環境の変化がある中でも、意欲を持って活動し生き生きと生活する子どもを育てたいと考え、この主題を設定した。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

変化していく環境の中で、子ども達が異年齢児や身近な自然との関りを通して、友達や保育者と一緒に夢中になって遊び、生き生きと生活できる環境構成や援助の方法を探る。

#### ②研究の重点

- ・幼稚園やこども園の幼児教育実践に学び、職員相互の工夫の仕方を深めていけるよう取り組む。
- ・めざす子ども像について職員一人一人がイメージを持ち、保育の質の向上に努める。

#### ③活動の方法

#### 【0歳児】『坂道 のぼろう』5月

- ねらい**
- ・はうなど体全体を動かして、遊ぶことを楽しむ。
  - ・保育者との信頼関係の中で、自分の気持ちを安心して表す。

ハイハイを中心に体を十分に動かして遊べるよう、部屋の真ん中に坂道スロープを山型に置いて、いつでもできるよう環境を整えた。

楽しみながら体を動かせるように保育者が♪のっここのっこカメのこ♪を歌いながらハイハイしてスロープに登って見せたり、頂上からリズムを取りながらスロープ下にいる子を誘ったり、スロープから離れている子に手を振ったりして興味をもてるようにした。

保育者がスロープをハイハイする姿を真似て登ろうとするが、そのまますべり下ってしまう。あきらめて違う遊びに行くので、登りやすい面のスロープに誘っていった。

少しずつ登れるようになる度「すごいね」「やったー」と言葉がけをしていき、できた姿を認めていった。登ることが楽しくなってくると、何度も繰り返し遊ぶようになり「おもしろいね」と言葉がけをして楽しさを共有していった。スロープに登って喜ぶ姿を見たまわりの子が「やってみよう」と関心を持って試し始めた。



#### (反省・評価)

- ・物、事、人に初めて出会う0歳児にとって、いつもと同じ場所で、信頼関係にある保育者と、いつでもできる空間の中で安心して遊べる環境がとても大切だと再認識できた。
- ・何度もスロープでハイハイを繰り返し遊ぶ中で、できた姿を一人一人丁寧に受けとめ認めることで、子ども達の「もっとしたい」「やってみたい」という意欲につながったと思う。

#### 【1歳児】『感触あそび』8月

- ねらい**
- ・水、氷、寒天など感触を味わう。
  - ・保育者や友達と一緒に夏のあそびを十分に楽しむ。

友達がジョウロで上から水を降らせて「あめー！」と言って遊んだり、カップに水を入れて「ジュース」と言ってみたりと、水遊びを楽しみ様子に興味をもち、回数を重ねるごとに水遊びを楽しみにする子どもが増えた。夏ならではの遊びを通して様々な感覚を経験してほしいと思い、いつも遊んでいるプールに氷を入れたり、普段過ごしている部屋の中で片栗粉遊びをしたり

と、慣れた環境の中に新しいことを取り入れるようにした。8月の乳児合同での感触遊びでは片栗粉、寒天、氷、といを使ってプールに水を流す、水風船のコーナーを用意し、慣れた室内に寒天と氷を配置した。2歳児がプールからペットボトルに水を汲んできて、といから水を流す姿を見て興味をもち、真似をし始めた。また、片栗粉遊びでは“ぎゅつ”と握ったときに固まって、少しすると指のあいだを“トロ〜”とすりぬけていく感触や不思議さを体験した。初めての水遊びでは小さな洗面器に張られた水の表面に指先をつけるだけでも怖がっていた子ども、片栗粉を頭の上から掛け合い、友達との関わり合いの中で、手だけでなく体全体で不思議な感触や感覚を味わっていた。



(反省・評価)

- ・初めてのことにとても慎重な子や抵抗を示す子もいたが、触りやすいように少人数で遊んだり、慣れた保育室に環境を設定することで、子どもが自主的に「触れてみたい」という気持ちがあった。
- ・様々な感触遊びの中から自分で選ぶ場をつくることで、子どもの体と心が動いて、自ら遊び出せる力の成長を見られた。そして、合同遊びの中で2歳児と関わり、新しい刺激を受けることで新たな意欲につながる要因になった。

### 【2歳児】『わっ大きくなって』9～11月

**ねらい** ・友達や保育者と一緒に大根の生長を見ながら、いろいろな発見をし身近に感じられるようにする。

『おおきなかぶ』の絵本が好きで「うんとこしょ〜」といつも動作を真似て楽しんでいる。そのことから、子ども達に絵本のような体験をさせたいと思い、大きく育つであろう大根を植えることにした。「大根どうなったかな?」「お水あげに行こうか」と、さりげなく声かけをして大根に関心を持てるようにした。次第に子ども達の方から「大根見てこようっと!」「わっ大根大きくなって!」と発見したことを友達と共有したり、保育者に伝えたりするようになった。

また、収穫前に「土の中で大根ってどんな形してるかな?」と子ども達と話してみると「ドーナツみたいな形!」「さんかく」「フライパンみたいと違う?」とイメージしたことを伝える。

そして収穫をする時には「うんとこしょ、どっこいしょ」と絵本のように友達と一緒に引っ張り「抜けた〜!!」と大根を持ち上げ、にこにこしながら大喜びしていた。

収穫した大根をさわったり、においをかいだり、形を見たりした後、作品展では自分たちの大根をビニールや画用紙を使って制作した。その後も絵本を「おおきなだいこん」などと言いながら楽しんでいた。



(反省・評価)

- ・畑で栽培できないという環境だったので、部屋のすぐ近くに土のう袋とプランターを使って植えた。それが子どもたちもすぐに見に行ける環境となり、収穫するだけではなく成長の様子にも興味関心を持ってほしいという保育者の思いとうまく重なった。
- ・保育者は子どもたちから出た言葉を丁寧に拾いながら、より興味が持てるように問いかけたり、次へつながるような言葉を投げかけていくことで収穫した時の感動やいろいろな発見につなげていくことができた。

### 【3歳児】『わあ! うまれた!!』5月

**ねらい** ・身近な生き物を見たり触れたりして興味をもつ。

園庭で虫探しをし、見つけた生き物(ハサミムシ、ダンゴムシ、テントウムシなど)を飼育ケースに入れて観察する子ども達。図鑑を用意すると、いろいろな種類がいることや飼い方を知る。毎日虫探しや観察を繰り返す中で「飼いたい」と子ども達から声があがり、霧吹きで水をあげたり、給食室からもらった野菜をあげたりして保育者や友達と一緒に世話をする。飼育ケースを保育室の前に並べ、いつでも見られる環境をつくり、発見や変化など気付いたことはクラスのみみんなに紹介し共有した。生き物への興味がより高まる中、生き物に興味を持った子どもが『クラスのみみんなで世話をしたい』と、家で見つけたアゲハチョウの卵を持って登園し飼育が始まった。毎日観察する中で「あ、生まれてる」「葉っぱ食べてるなあ」「黒い色してる」と、大きくなっていく様子や色や模様の変化に気付いたり、図鑑を見て「一緒や」「次は緑色になるねんで」と見比べたり、次はどうなるのだろうと期待する姿が見られる。さなぎから成虫になる場面に立ち会うことができ「羽広がってきた」「がんばれ!」と歓声があがった。

(反省・評価)

- ・飼育ケースや図鑑を用意し、見つけた生き物をいつでも見える環境にしたことや、成長の変化が目に見えてわかりやすいアゲハチョウの飼育を取り入れたことが、飼育する意欲、成長や変化への期待感につながった。また、図鑑を見て調べたり本物と見比べたりすることで、生き物への興味・関心が深まり学びにつながった。
- ・世話をする中で、触りすぎて弱らせてしまうことがあった。意欲的に世話をする子どもの気持ちを受けとめながら、扱い方などを知らせていきたい。

#### 【4歳児】『クリスマスツリーをつくろう』12月

ねらい

- ・自分なりのクリスマスツリーのイメージを持ち、好きな遊びにじっくりと取り組み繰り返したり工夫をしたりする。
- ・友達とイメージを共有して遊ぶ。

子ども達のなかでクリスマスの話題が広がり、共通経験でクリスマスツリーの絵をかいたことから、A児の『クリスマスツリーを作りたい』という思いにつながった。A児が素材を探すが、イメージに合うようなものが見つからなかった。遊びの振り返りで、クラスの友達に相談をすると「キャンプごっこで使っているテントに緑の布を巻いたらいいやん」というアドバイスをもらい、クリスマスツリー作りが進み始める。作り進めていく中で『より本物に近づきたい』という思いが強くなり、園内にあるクリスマスツリーを観察しに行き、星や人形などを作って飾った。クリスマスツリーができてくると「電気(懐中電灯)を使ったら光るん違う？」という提案があり、照らしてみたが思ったように光らなかった。「中からやってみよう」と、ツリーの内部に入って照らすと、思ったように光った。クリスマスツリー作りがクラスで広がり、飾りが増えてくると重さに耐えれずツリーが何度立て直しても倒れてしまう。保育者が「らいおん組(5歳児)さんのテントはどうやったやろう？」と伝え、B児が「らいおん組さん(5歳児)のテントは下に棒があったから、その方が倒れにくいのかも」と気づき、保育者と切った木の棒をガムテープで取り付けていくと安定し、倒れなくなった。ツリーが上手く立ったことを友達と喜び合い、クリスマスツリー作りを続けていた。

(反省・評価)

- ・共通経験の中で興味を持っているクリスマスツリーの絵をかいたり、ツリーが身近に飾ってあったことで、クラスでイメージを共有して、本物らしく作りたいと意欲的に作る姿につながった。
- ・上手いかないことも遊びの振り返りで共有し、これまでの経験を活かして、みんなで解決していく姿があった。そのことが一人一人の自信になり、表現意欲の高まりや作り上げたいという思いにつながって遊びが深まったと思われる。

#### 【5歳児】『一緒に遊ぼう』6～7月

ねらい

- ・友達と一緒に考えたり試したりして遊ぶ。
- ・異年齢の友達とのかかわりを通して、親しみの気持ちをもったり優しくかかわったりする。

保育室では、コースを長くつないで転がしコースをつくって遠くまで転がそうと試して遊んだり、アイドルステージごっこでは「今日は何の曲にする?」「こんなふうには踊ろう」と歌ったり踊ったりして楽しんだり、ステージでのチケットや食べ物をつくったりして、友達と遊びを進めて楽しんでいる。自分たちの遊びが充実すると「お客さんにも来てほしい」と考える。

1階の同学年・幼児組と2階の保育室の環境から、保育室を自由に行き来して一緒に遊ぶことは難しい。同じ2階の乳児とは、廊下を歩いたり、トイレで自然と顔を合わせたり関わったりしていることもあり、自然と誘いかけに行くようになった。アイドルステージごっこでは普段クラスの友達と遊ぶ時には「〇〇の曲にしてよ」「何で勝手に音楽変えるの」と、トラブルになることも多いが「いらっやいませ」「ここに座ってください」「これやってみたいの?」「こうやってできる?」と声をかけたり、鳴子の使い方を教えてあげて一緒に踊ったり、また乳児さんの思いを聞き入れ様子を見守ったりしていた。転がしコースは、高い所から転がせるようにつくっている。普段クラスの友達と遊ぶ時には、少しコースが崩れたり、友達とつくりたいコースの思いが食い違っただけで「やめてよ」と怒ったりトラブルになったりしていたが、台の上で手が届かない乳児さんに、積み木やイスを持ってきて転がしやすくしてあげたり、他の乳児さんが保育室内を歩き来する時にコースが壊れても何も言わずそっとコースをつくり直したり、コースの途中でボールが詰まるのを見て、そっと転がしてあげ「やった!最後まで転がったね」と喜んであげたりと、さりげない優しさを見せたりしていた。遊びの振り返りでは「いっぱい来てくれた」「ありがとうって言ってくれて嬉しかった」と話していた。





#### (反省・評価)

- ・今年度よりこども園となり、遊びの環境が充実できるよう、遊びの道具を見直し補うようにした。
- ・年長児になり、小さい子に対してお世話をしたいという気持ちが高まる時期に、保育室が乳児組の階という環境がうまく重なり、自然と異年齢の遊びのつながりを持つことができた。
- ・普段、自分の遊びに夢中になったり友達にきつく当たったりする子もいるが、自分たちの遊びを喜んでくれる乳児からの反応が嬉しくて、かわいい、もっとかかわりたいという気持ちが強まり、普段同年齢では見ることはできないさりげないやさしさを見せるなど、さらにやり取りが発展していった。

#### 【長時間】『年長さん、かっこいいな。小さい子、かわいいな』

ねらい

- ・異年齢の友達とかかわりながら遊ぶ。
- ・異年齢児と一緒に過ごす中で、刺激を受けたり、思いやりを持ったりする。

今年は夏の暑さや、新園舎への引っ越し作業などで、3・4・5歳児が自然に触れ合って遊ぶ機会が持てなかったため、長時間担当で話し合い、5歳児がグループごとに分かれて3・4歳児の各クラスに行き交流を持つことにした。

3歳児クラスでは、同じテーブルで食事をした5歳児がなかなか食事の進まない3歳児に、スプーンをもって食べさせてあげると、大きな口を開けて食べることができた。保育者の「お野菜食べられたね」という言葉に、どちらの子も嬉しそうに笑い合っていた。

4歳児クラスでは、5歳児が普段から経験している内容を入り込みの日の活動に取り入れ、交流を持った。色水作りでは、使うクレヨン紙の大きさや水の量をやって見せながら伝え一緒に楽しんでいた。また、サーキット遊びでは、5歳児がコースを組み立てるところを任せられ、箱積み木やフープ、縄などを配置した。「年長さんになったから重たくないよ」「どうしたら4歳さんが楽しいかな」と、それぞれが工夫し組み立てた。できあがると4歳児は、5歳児が遊んでいる様子を見て真似したり、自分では難しくてできないことを手伝ってもらったりして「お兄ちゃんすごい」「お昼寝の時、とんとんして欲しいな」と憧れや親しみの気持ちを持ったようだった。

5歳児は、保育室に帰ってくると、ほっとした表情を見せていたが「3歳さんに、ご飯食べさせてあげたらたべたよ」「4歳さんの子、僕の真似ばかりしてたで」「床拭き上手って言われたよ」等、頼りにされたことを嬉しそうに報告していた。



#### (反省・評価)

- ・初めての経験で緊張している子どもが多かったが、3歳児・4歳児の保育者が、現在の5歳児の姿に合わせて保育内容や環境設定を工夫し活動を進めたり、自然に触れ合えるように仲立ちをしたりすることで、5歳児のできる事が上手く引き出され、5歳児にとっては力を発揮できる良い機会となった。また、できることを認めてもらったことは、人の役に立てたという大きな自信につながる貴重な経験になった。

#### 5. 研究の成果

- ・乳児では、安心できる保育者とともに活動することで、繰り返し遊びを楽しんだり、できた喜びを感じたり、身近な事象に興味を持ったりすることができた。子どもの興味や関心、発達に応じた環境を整えること、一人一人の思いを受け止め共感していくことの大事さを再認識できた。
- ・幼児では、遊びの振り返りの大切さ、子どもと相談しながら試したり工夫したりしながら素材・用具を整えることの重要性を感じ、保育環境を見直し整えることができた。

#### 6. 今後の課題

- ・0～5歳のこども園として職員間の連携(乳児・幼児・長時間)が重要な課題である。0～5歳児を見通した保育の在り方、異年齢児の自然なかかわりや交流が実践できるよう職員間での話し合いや共通理解が必要である。
- ・子どもが意欲的に遊び、遊びこめる環境を構成するためには、子どもの興味関心が何に向いているのかを見取り、人的物的環境を整え、保育者の援助の在り方を追求していきたい。